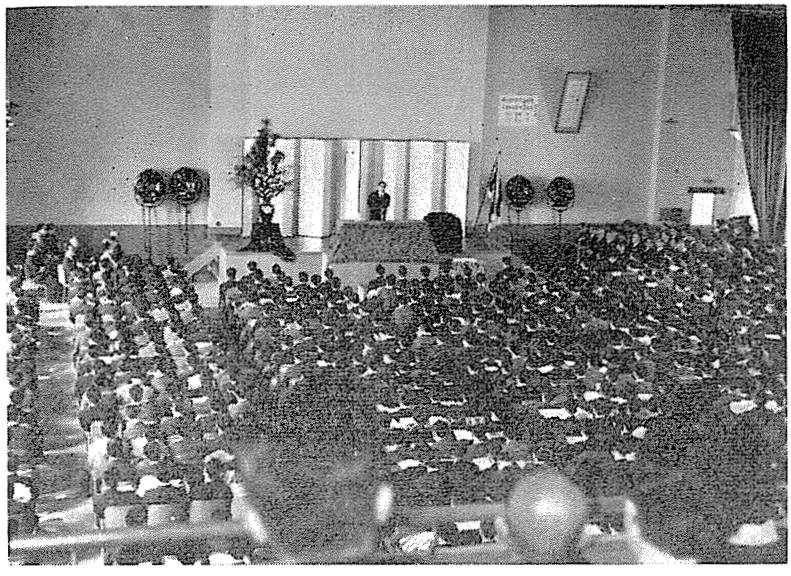
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, Mar. 30th, 1960, No. 337.

通巻三三七号

關西大學學報

昭和35年3月　第337号



学士証書授与式

關西大學出版部

一カ月で地球一周ひとり旅

ロンドンの国際目録会議に出席して

天野敬太郎
図書課長

私は、関西大学から出張を命ぜられて、昨年七月二十日から二十五日までロンドンにおいて開かれた国際図書館協会連盟（International Federation of Library Associations）主催の国際目録会議（International Cataloguing Conference）の予備会議（Preliminary Meeting）に日本の代表として出席し、そしてヨーロッパの主要図書館を見学したのである。

今までアメリカの図書館については、読んだり聞いたりして、知る機会が多いのであるが、ヨーロッパの図書館については、見学した人も多少はあったが、アメリカ程に認識されていなかった。このたびの見学によって、やはりヨーロッパの図書館は大分趣きが異っていることがよく判り、学ぶところが大いにあった。

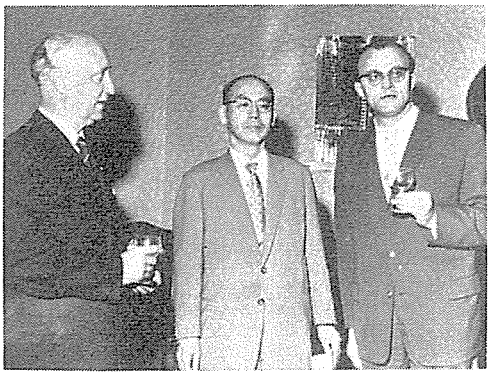
図書の目録は、各国において図書館やその他で作られて、その国で利用されているが、中には目録の方式が異なっているために、折角作られたよい目録も他の国では十分に利用し難い場合がある。そこでどこの国のものでも容易に利用し得られるようにするためには、目録の方式を協定する必要がある。このことは以前から考えられていたが、十分に熟するに至らず、戦後その機運となり、一九六一年にそれの大会議を開催するために、今回主要な国だけで予備会議を開くことになったのである。そして日本から代表一名の派遣を日本図書館協会に要請して来た。日本としては、和書の目録にも、洋書の目録にも精通した者が出席せねばならないのであるが、計らずもそれに、私が選ばれたわけである。

一ケ月で地球を一周という超スピードの旅行であった。アメリカ本国に行かなかったので、世界一周といえないであろう。羽田を出て東北に飛んで、アラスカから、寒い北極圏を経て、ヨーロッパに行き、デンマークから、フランス、イギリス、ドイツ、スイス、イタリアを見学して、帰りは南廻りで、イラン、インド、タイ、ヴェトナム、フィリピンと暑い赤道の北方に着陸しながら、羽田に帰着、所要日数は三十日であった。この間に、空港発着十五回、見学した都会九つ、空港での荷物の受け渡しの十一回は煩わしいものであった。

昨年七月十六日(木)、東京の図書館関係者約二十名に見送られて午後七時三十分羽田をエール・フランス（AF）機で出発した。羽田の空港で待っている時には日本人が十人ばかりいて、話し合っていたが、それが飛行機に乗ると一等（十六席）には日本人は私一人で、他の日本人はツーリスト・クラス（二等）に入ってしまって顔さえ見えず少し淋しかった。座席のクラスは会議の方で指定されていたのである。二人掛のイスの隣は幸いに空席で誰も来ず二人分使えて気楽であった。スチュアーデスに日本女性で話し易く、食事を配給するフランス人男ステュアードが「召しあがれ」などの簡単な日本語を使うのは、ほほえましかった。夜中の十二時頃になると、空は次第に白らみかけた。北極は白夜のためである。アラスカのアンコレジ（アラスカ第一の都会、人口六万五千）に初めて着陸、時に日本時間十七日七時二十分、アラスカ時間十六日十二時二十分。物めずらしく空港の休憩所に行くと売店に色々なものがある。こんな北方の小さい町にも日刊新聞が出ているのに驚く。半日前に別れたばかりの日本へ通信を出すのも奇妙に感じた。一時間休憩の後に出発し、なお東北に向って北極圏に入る。機内は十五度位で、機外は〇度以下二十五度の由。飛行機の機械に故障があってスピードが遅く、ドイツのハンブルクに到着の予定を変更して、標準時十七日一八・三〇（日本十八日二・三〇）デンマークのコペンハーゲンに着いた。空港で三時間ばかり休んだのに、市内の見物が出来なかったことは物足りなかった。三・三〇SAS機で出発、パリーの北空港ブルジェに着いたのは十八日〇・三〇（日本八・三〇）であって、羽田から三十七時間で予定より七時間ばかり遅れた。空港からバスでターミナルのあるアンバリドに行ったのであるが、深夜ではあったが、初めて花の都のパリーに来たことの歓びは又格別であった。ホテルに入ったのは三時半。一睡して朝となり、近くにあるメトロ（地下鉄）でオペラに行き、ラファイエト百貨店などを見る。路面電車のない都市を始めて見たのであり、日本とイギリス以外は、すべて右側通行であることも勝手が違う。午後は観光バスで、宮殿、パリ大学、ノートルダム、サクレクールなど市内の主要ところを見る。又、セーヌ川畔を散歩して古本出店も見た。夜はAFの高谷亀次氏に市内を案内して貰った。翌十

九日午後一時、南空港オーリ出発一時間二十五分でロンドン空港に到着した。ターミナルでトランクの到着がかなり遅れたため大へん心配させられた。交渉してヤット入手し、会議で定められたタビストック・ホテル（大英博物館の近くで東北の方角）に入ったのは午後五時過ぎである。部屋に入ると息つくひまもなく、電話がかかって来た。それは会議の幹事の一人でドイツのシックマン氏からであって打ち合せをした。その夜一六・〇〇―二一・〇〇までこのホテルでレセプションがあって、各国の代表と初めて出合った。（写真はその時のもので、向って左はスウェーデンのオテルヴィク氏、中は筆者、右はドイツのシックマン氏）

翌二十日（月）午前九時半から会議が始まる。会場はイギリス図書館協会のあるチョーサーハウスの階上で、ここはホテルから歩いて五分位の処にある。五日間毎日午前九時半から午後四時半までで、十一時から三十分間と午後一時から二時間（昼食）は休憩の時間である。議長は、大英博物館館長FLフランシス氏、運営委員は同館のAHチャプリン氏とドイツのケルンのLシックマン氏で、書記のDアンダーソン夫人が色々の実務をする。今回の会議の正式のメンバーは十五人で、イギリス、イタリア、ドイツ、ユーゴ、オーストリア、スウェーデン、オーストラリア、インド、ブラジル、日本が各一名、フランス二名、アメリカ三名の十五名、外にオブザーヴァーとして、イギリス六名、ドイツ、カナダ、アメリカ、ヴェネズエラ各一名、ユネスコ三名の十三名が出席した。会議前に各国から、あらかじめ Working Paper（研究論稿）を出すことになっていたので、日本側も出して置いた。それ等が印刷されて配られた。この外に、日本の図書館や日本の目録などの実情を紹介するために、日本図書館協会発行の "Libraries in Japan"（七六頁）と、この会議のために急いで作った「日本目録規則」の英訳と、それに私が作った「日本における洋書目録法文献目録」の英訳を持って行って配布したので、大へん歓迎された。



上段10行～12行参照

会議は、国際目録会議の目的と範囲、目録構成についての一般原則、基本記入の選定、個人著者名の扱い方、団体名の扱い方、書名記入と形式記入、継続出版物などについて研究討議し、さいごに一九六一年の会議の方法、場所の問題、経費の問題についても協議した。前記の技術的諸問題は、百年前から研究を繰返しているものもあって、解決したものもあるが、次回に持ち越したものもある。一九六一年の本会議は四月又は九月に十日間の予定で、パリのユネスコ本部において開催することになった。今後の運営委員は従来の二人の外にフランスのポアンドロン氏を加えて三人に頼むことになった。そして次の本会議に私に是非とも出席するように望まれた。

会議期間中、その日の会議が終ってからも、色々な会合に出席した。二十日（月）の夕は、フランシス館長の主催で目録上東洋人名の取り扱い方の研究のため、関係者七名ばかりと一緒に大英博物館構内にある同氏の官邸で会合した。二十一日（火）の夕は、大分離れたハイドパークの南方にある Aslib（専門図書館協会）の招待のパーティに出席し、会議関係者一同と同協会の会員と懇談したが、百名近く集って盛大であって、多くの人々と知り合うことが出来た。二十四日（金）の夕は、チャプリン氏のパーティが、大英博物館の近くにある同氏の私宅で催された。参加者約二十名で会議以外の人もいて、色々な人となごやかに話し合う機会が得られて好都合であった。

ロンドンには八月二日まで滞在したが、この間に、大英博物館図書館、ロンドン大学本部図書館、同大学東洋及アフリカ学校図書館などを見学することが出来た。大英博物館（一七五三年創立七〇〇万冊）はさすがに立派なものであり、新古の書物は充満し、目録は当館独特の方式のもので特色がある。東洋部は日本の書物を多数所蔵していて、部長のガードナー氏は日本語が達者で日本書をよく研究されている。閲覧室の座席はユッタリとしていて、机は実に広く、イス、電灯、書見台など完備していて、落ちついて研究し得うるようになっている。私は閲覧許可証を貰って、滞在中、時間の余裕があればこの閲覧室に出入し、古典派経済学の書物を調査した。

ロンドン大学本部図書館（六五万冊）の建物は新しい。リッチネル氏が大へん懇切に案内された。種々な特

殊集書があるが、イギリス経済学古典のゴールドスミス文庫（六万冊）は最も偉大である。又ベーコンやシェクスピーアの集書などもある。雑誌閲覧室が新設されて整備中であった。同大学東洋及アフリカ学校（二十万冊）は、ヨーロッパ以外の研究書がよく集っている。日本部には、宮本昭二郎氏が勤務されていて、日本の書物特に新刊書が多い。東洋及アフリカ部学校図書館長のピアーソン氏は、私がロンドン滞在中、その世話のため宮本氏に事務を休んでよいという特別な便宜を計って下された。従って宮本氏から色々と親切に教示を得、又、ロンドンの観光なども出来た。ウェストミンスター寺院、セントポール寺院、ロンドン塔など史蹟や公園も見たし、又、コメデーやオペラを観劇する機会もあった。

ロンドンも路面電車がない。真赤な二階建バスは面白く思って二階に乗って見た。地下電車は日本と違って縦横に走り、交叉点は立体で三重の処もあり、日本より地下が深く、すべてエスカレーター又はエレヴェーターによって昇降するので歩かなくてよく、判り易いから、よく利用した。

ロンドンで愉快であったことの一つは、古本漁りである。日本の古本屋より規模が大きい。店内に公開している以外に数倍の書物を保持していて、それを整然と分類し、図書館の書庫のように五階六階建てに書物がギッシリつまっている。又、広い地下室に入れている店もある。専門の分野をいうとその処へ案内して呉れる。そこには関係書が集っていて、店員の人も傍に居らず、一人でユックリと一冊ずつ自由に読みながら選ぶことが出来るのである。

オックスフォードとケンブリッジへも出かけた。それぞれ前以って連絡し、七月二十九日（水）パディントン駅から汽車で、一〇・五八オックスフォードに到着、ストーリ教授が駅に出迎えて下さった。同氏繰縦の車で大学に行き三十幾つかあるコレジのうち主なものを説明され、下車して中に入ったところもあった。ボドリアン図書館にも行ったが、東洋部で名刺を出したところ、すぐ私の著書を出して見せてくれたのには驚いた。ボドリアン図書館（一六〇二年創立、二一〇万冊）は、十七世紀の古い建物も新しい建物もあり、色々に別れていて複雑である。地下室には特殊な書物の自由運搬機がゴトンゴトンと常に動いている。最後に最も奥にあるストーリ氏のセント・アトニー・コレジに案内され、氏の研究室に入った。それからこのコレジの食堂で昼食したが、ここは、教授と学生が一緒に食事するのであるが、休暇中のため、少なくて二十余名であった。この席でハドソン教授に紹介された。同氏は夕方パーティを催すから是非出席するように申された。それから、もっと奥にあるストーリ氏のお宅に連れられてしばらく休息した。時間になってハドソン氏のパーティに出席したのであるが、十数名が参加していた。ストーリ氏に駅まで送って貰ってロンドンに帰った。

翌三十日（木）、リバプール駅一〇・三〇発汽車でケンブリッジに向い、正午到着した。キーデル教授が駅に出迎いに来て居られた。キーデル氏には宮島先生から紹介状を頂いていたが、大英博物館のガードナー氏からも連絡された。氏の車で大学に向い、最初、東洋科に案内され、次いで大学図書館（二〇〇万冊）に行った。この図書館は一九三四年に新築されたもので、アメリカ式の近代図書館である。しかし、分類と書物の大きさを考慮し、書架の棚板の間隔を調整して、スペースの無駄を省くことに色々と工夫をこらしている。イギリスで日本書が充実しているのは、この図書館であって、WGアストンの日本文庫もある。キーデル氏が日本書を熱心に研究されていることは、ロンドンのガードナー氏と好一対である。キーデル氏に駅の途中まで送って貰って、ロンドンに帰った。

八月二日（日）、この前後は、連休のバンク・ホリデーであって、ロンドンの人々は方々へ旅行に出かけて交通が混雑する時期の由である。慣れたロンドンを後に空港に向った。旅券検査の所で検査するイギリス人から「サヨナラ」と愛嬌ある言葉を貰って、うれしく感じた。午後三時空港出発（AF）、四時過パリーに戻った。前のホテルに入ったが、パリも少しは慣れているので、すぐに飛び出て、凱旋門附近を散歩した。

翌三日（月）は、国立図書館へ行ったが、約束の人が欠勤のため果さず、ルーブル博物館や古本屋など見た。ルーブル博物館は一と通り見るだけでもなかなか疲れる。

四日（火）は、ユネスコの建物やエッフェル塔を見て、再び国立図書館へ行った。宮島先生から紹介状を貰った人は既に退職していた。ロンドンでチャプリン氏のパーティの際に始めて会った当館勤務のミス・バライエに頼んであったので、親切に案内し色々と説明を受けた。この図書館（一四八〇年創立、六五〇万冊）は古く余りに参考にならないだろうと思っていたが、あに計んや、古い革袋に新しい酒を盛る感じで、見るべきもの多々あり、特に目録室は、閲覧室の下の広い地階全部があてであって、各国の目録がよく集って整頓しているのには驚いた。帰りはコンコード公園など散歩した。ロンドンでは、タイプライターを売る店を沢山見かけたが、パリでは全く見られない。

五日（水）、ターミナルで札幌市助役小塩進作氏に会って一緒に乗り、午後〇時四五分パリを立ってAF機でドイツに向った。途中、デュッセルドルフに一回着陸、小塩氏はここで降りた。三時ハンブルク着。めずらしく小雨が降っていた。ここにはターミナルがな

い。予定の駅前のオイローパホーフ・ホテルに入り、すぐ市内を見に出かけた。

六日（木）、午前は観光バスで市内を一応見学し、午後ハンブルグ大学に行き、まず、日本語科を尋ねたが、七月は開いていたけれども、あいにく八月は休暇のため閉鎖されていた。それから少し離れた大学図書館に行った時は、遅かったので、ザッと見学した。規模は小さく、目下書庫が増築中であった。ドイツは、タバコ屋、花屋、自転車を売る店の多いのが目に付くが、各々都会色の比較は面白い。

翌七日（金）、午前九時ハンブルクからルフトハンザ機（ＬＨ）で南方へ一時間フランクフルトに到着。この附近の郊外の自動車道路の発達ぶりが特に目立つ。ホテルに荷物を置いてすぐ出かけた。午後、観光バスで、ゲーテの家、市庁、植物園など見学し、フランクフルト大学は、バスの中から見ただけで訪問の時間がなかったのは残念であった。

八日（土）、朝フランクフルト空港に行ってジュネーヴ行きを待った。この空港はヨーロッパ第一と称せられていて大きく、多くの飛行機が各方面に飛んで行く。ところが時間が来てもジュネーヴ行の呼び出しがない。不安に思って聞きに行くと二十分遅れる由であった。ところが長く異邦人が待っていると見た別の係員が心配して尋ねに来てくれた。やはり親切なものである。十一時三十分発（ＬＨ）午後一時二十分ジュネーヴに到着、この空港は市内に近い。ジュネーヴは多事であった。宮島先生から御紹介を貰っていた国際労働局（ＩＬＯ）の荻島氏に連絡がしてあったが、会うことが出来なかった。

九日（日）、日曜日のためＩＬＯは休み、荻島氏へは電話しても通じないので、ＡＦ事務所で調べて貰った住所を頼りにして出て行った。町名番地は合っていたが、探偵小説にあるような薄暗い階段のある五階ほどの建物に迷いこんだ。各室に標札があるが暗くて読み難い。全く知らない土地であり、人影はなく陰気で無気味なことおびただしかった。（後で聞いたら、町名の綴りが少し間違っていたのであって、方角違いを探していたのであった。）判らないので探すのをあきらめて、宗教改革記念碑のあるジュネーヴ大学に行ったが、日曜日のため大学は閉鎖していたので外から眺めた。午後、観光バスで国際連合、国際労働局の外観や市内を一通りを見た。

十日（月）、ＩＬＯに荻島氏を訪問し、同局の内部や図書館を見学した。図書館には労働関係の世界中の雑誌や図書がよく揃っていた。午後、汽車で一時間、二時にローザンヌに到着したが、大夕立でどうにもならない。一時間ばかり駅で待って、車で程近いコルトー氏（ピアニスト）の宅に行ったが、残念ながらコルトー氏はイタリアへ旅行中のため会えなかった。田中一郎氏から頼まれた品物を令息に預けて引き返し、湖岸のウーシに出かけて眺望したが、天気は回復し快晴となっていた。帰りにローザンヌ駅でジュネーヴ行のプラットフォームを聞いたとき、フランス語で三番フォームといっているのであるが、トアー（トロアとハッキリいわない）というので判り兼ねて聞き返すと指を三本出した。この場合に我々は中の三本の指を出すように思うが、この駅員は大きな親指、人さし指、と中指を出すのでおかしく思った。数を指で示すことはパリの空港でもあった。トランクの受渡場で一箇出した時、先方はフランス語で数を聞くが、理解が出来ないので聞き返すと、親指を一本出したり、親指と人さし指を二本出したりした。親指一本で一箇を示すことが、私にはどうもすぐ理解できなかったのである。

十一日（火）、ジュネーヴのターミナルで待っている時に、宝塚の高木史郎氏に出合った。同氏はウィンからスペインに向う途中の由であった。又、札幌の小塩氏にも再び会ってイタリア機（ＡＺ）でローマ空港まで一緒に乗って行った。夜ローマの市内を見た。

十二日（水）、午前、観光バスで選んだ第三コースは特にヴァチカンに重点が置かれていた。ヴァチカンは、博物館、美術館、図書館の三位一体となっているが、図書館だけは休館していた。しかし、館の前のケースに珍しい古写本や古版本を多数陳列していたので、一部分は見られた。ヴァチカンの鑑賞の時間が足りないので観光バスの一団から脱退を申し出て一人居残って見たが、僅かな時間で見尽されるものではなかった。午後も、観光バス第四コースで多くの美術館や寺院など見学と鑑賞したが、ローマは見るべき処が多く、時日が不十分のため物足りなかった。ローマの観光バスは、ホテルに申し込んで置くと、各々そのホテルまで迎いに来て、中央の溜り場に乗客を集め、ここで乗客を国語によって編成して説明を聞くに便利なようになし、観光が終ると再び各ホテルへ送り返すという親切な方法がとられている。ヨーロッパの郵便局には手紙を書くための机とイスが設けてあるが、ローマではタイプライターが数台提供されていて、サービスのよいのには感心した。

その夜、ターミナルで空港行のバスを待っていると、向うのイスに二人の日本人らしい男が手を上げて、「ヤー」と呼ぶので近よって行った。どこから来たと英語で尋ねるので「日本から」と答える。こちらもどこから来たと尋ねると先方は「カンボジヤから」と答えたので驚いた。先方も驚いた。先方は私をカンボジヤ人と見て呼んだらしい。私は日本人だと思って近付いたのであった。朝鮮人や中国人は大体よく判かるが南方系の人は日本人とよく似ていて、日本人と間違いかけたことがしばしばある。

ローマ空港で待っている間に、名古屋大学教授新村猛氏と偶然に出合った。一年四カ月の留学を終って日本に帰られるところで、道連れが出来てよかった。パリから東京行のＡＦ機で、ローマ午後十一時（日本時間十三日五・〇〇）発、既に乗客は乗っていて、二人掛けのイスの隣席はどんな人であるかは一寸不安でもあった。乗って見ると、又、日本人は一等には一人もいない。隣の席は二十才頃のイギリスのお嬢さんであって、通路をへだてた向うの席にいる姉と母親の三人連れであった。一寸おせっかいな娘さんで、イスの動かし方や電気のスウィッチなどを既に知っているのに、色々と親切に教えてくれた。話し相手によいと思って、どこへ行くのかと尋ねたら、次に着陸のテヘラン（イラン）と答えた。次に来たのは、子供二人連れた夫婦の四人組のうちの母親であったが、よく寝る人で話す機会もなく、次のニューデリー（インド）で降りて行った。その後は羽田まで誰も来なかったので、二席を占領することになった。それから、タイのバンコック、ヴェトナムのサイゴン、フィリピンのマニラに着陸し、大体一時間ずつ休んで次へ出発した。羽田に着いたのは十四日（金）予定の午後九時より遅れて十一時二十分（ローマから四十時二十分）であった。東京の図書館関係者が十人ばかりが出迎えに来て下された。

八月二十四日から二十八日までの千里山学舎における私立大学図書館研修会に出なければならなかったため、日数が非常に短かったのである。

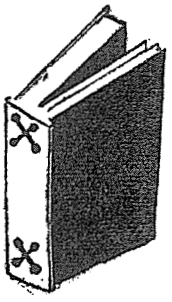
この年は、ヨーロッパは特に暑いとのことであったが、それでも日本よりは涼しかった。ロンドンでは合服を着ていて上衣を脱がないことになっているので、そのようにしたが、苦しいこともあった。異様に感じたのは、どこにも扇風機を見ないことである。売ってもなければ、備付けているところもない有様である。

初めての都市に着くと、まず観光バスで市内を一覧して大体を認識し、次ぎに必要とする処を重点的に行くことにしていた。

九月五日、千里山学舎で本学図書館関係者一同に報告した。同十日、東京で日本図書館協会主催の正式報告会が開催されて、参加約七十名（この時の記録は、「図書館雑誌」十一月国際目録会議報告特集号に掲載されている）。同二十八日京都大学における京都図書館協会主催の歓迎会に報告。十月八日甲南大学において、私立大学図書館協会関西部会へ報告。同二十四日大阪府立図書館における日本図書館研究会主催の報告会。同三十日神戸アメリカ文化センター主催の読書週間の会でも簡単に述べた。

会議の詳細については、右の「図書館雑誌」三十四年十一月号を御覧願い度い。「机」（紀伊国屋書店）本年三月号に「オックスフォード大学」の短文を掲載した。なお「ＩＦＥＬ図書館学」にケンブリッチ大学図書館、「図書館界」に今回の見学の成果として比較目録法研究を発表する予定である。併せて御覧下されば幸甚であります。

このように、世界の多数の専門家と親しく接して、今や数名と文通するようになり、図書館並びに一般文化についての見聞を博め、多くの新しい知識を得る機会を与えられた関西大学に対し、厚く御礼を申し上げて擱筆しよう。



第三十七回学士証書授与式

関西大学第三十七回学士証書授与式は三月十九日（土）、一部・二部共、法学部文学部が午前十時より、経済学部、商学部が午後二時から、それぞれ千里山第一学舎講堂で、学歌斉唱、学長告辞、理事長挨拶、文部大臣、教育後援会長及び校友会長祝辞、証書授与、学友会功労者賞状並びに賞品授与等の式次第で、厳粛に挙行された。（表紙写真参照）

昭和三十四年度学士試験合格者数は左の通りである。

	一部	二部
法学部	五九四	二八一
経済学部	五七〇	一九五
文学部	二二三	九一
商学部	三二八	九九

法人設置学校卒業式

学校法人関西大学の設置する関係学校の卒業式も左の通り行われた。

三月二十四日　午前十時　大学院
二月二十八日　午前十時　第一高等学校
三月二十日　午前十時　第一中学校

学内報

定例評議員会

学校法人関西大学寄附行為第十八条第二項による定例評議員会は、三月三十一日（木）午後四時より天六学舎で開催。昭和三十五年度学校法人関西大学収支予算承認に関する件その他につき審議、これを可決した。

出席者（敬称略、五十音順）

阿部甚吉　池田信之助　今井康兼　岩佐清三郎　植野郁太　浦野健二郎　江里口春志　大小島真二　大島武夫　岡野衛士　織田佐代治　樫本信雄　門上敏夫　神宅賀寿恵　寒川喜一　小寺小市郎　河野稔　小林厳　佐伯五郎　白川朋吉　竹沢喜代治　寺西武　戸根泰雄　寛田知義　中務平吉　長柄金吾　浪江源治　西村治三郎　西本寛一　野間秀泉　春原源太郎　久井忠雄　久松鹿治　深川実　福島四郎　本多喜慶　堀正人　松原藤由　松村睦鴻　水谷揆一　宮崎平　三好万次　村尾静明　村上精三　森川太郎　八百村稔　矢口孝次郎　矢野文雄　山崎敬義　横田健一　吉田一郎　渡辺正人

大学院独逸文学専攻科増設認可

本学大学院文学研究科修士課程に、新しく独逸文学専攻を増設する件は、昨年十一月十日の理事会で決定し、同月二十八日文部省へ増設方申請していたが、去る三月二十一日付を以て、文部省より正式に認可された。

校大第一一一号
昭和三十五年三月二十一日
文部事務次官　緒方　信一
学校法人関西大学理事長殿

大学院研究科専攻増設について（通知）

昭和三四年一一月二八日付け関大発第一八号で申請のあった関西大学大学院研究科専攻増設のことは、下記のとおり増設してさしつかえないことになりました。

記

一、研究科専攻
文学研究科　独逸文学専攻　修士課程
入学定員　一二名
総定員　二四名
二、修業年限　修士課程　二年
三、開設年次　修士課程　第一年次
四、開設時期　昭和三十五年度

なお、独逸文学専攻では独語学及独逸文学研究十八単位が必須で、教授には内山貞三郎、福本喜之助、高尾国男、内藤好文、上道直夫の本学各教授が兼務する。また、大学院文学研究科修士課程は従来の英文学、国文学、哲学、日本史学の四専攻に独逸文学専攻を加え、益々内容を充実することになった。

福本教授に博士号授与

本学文学部教授福本喜之助氏は慶応大学文学部に博士請求論文を提出していたが同教授会をパスし、一月二十日（文部省）付を以つて文学博士号が授与された。

なお、博士号授与式は三月二日同大学で行われ、福本氏に学位記が授与された。

福本博士

略歴

昭和三年八月検定試験により師範学校中学校高等女学校独語教員免許状授与、同五年から八年まで選科生として京大で主としてドイツ文学と言語学を学ぶ、同八年から十一年まで同大学大学院聴講生、同七年七月検定試験により高等学校高等科独語科教員免状授与、同九年麻布獣医専門学校講師、同十一年立命館大学予科講師、同十二年同大学予科教授、同十五年ドイツ文化研究所文化講座講師、同十九年立命館大学専門学校教授、同二十一年教員適格合格、同二十三年聖トマス学院講師、同二十三年京都師範学校講師、同二十四年関大教授。

（授与学位）　文学博士

（論文題名）

「十七世紀ドイツ文語史よりみた外来語の問題とドイツ国語協会の意義」

（副論文）

「古代ドイツの外来語」
「中世ドイツの外来語」
以下十篇

人事異動

昭和三十五年二月一日付
療養休務を命ずる　助手　木田　和雄

昭和三十五年三月一日付
療養休務を解く　教授　明石　三郎

昭和三十五年三月一日付
休職を命ずる　教授　原　弘二郎

昭和三十四年度卒業論文題名（3）

——文学部——

ベルグソンの「笑い」について（第一章行動及形のをかしみ）土師　孝一
「哲学の現代におよぼす意義」　中村　勝人
サルトルにおける思想的転向の問題　成山　明一
全知識学の根底—自我の充実のために捨象せよ—　西井　勝
セーレン・キエルケゴール著「死に至る病」に於ける絶望の概念及びその形態について　野田　国基
（ヤスパース）実存への渇望　村井　広永
ニーチェの政治思想について　森西　英信
倫理の社会的立場に対する感受性　柳岡　保治
哲学の再認識とその一視点　山野　耕治
「D. Hume に観る人性の二元論」　山口　清

仏蘭西文学科

ジュール・ルナール『にんじん』について　今西　正頼
コデルロス・ド・ラクロ作『危険な関係』について　釜本　泰長
H・D・バルザックと『従妹ベット』　阪本　博明
『異邦人』アルベール・カミュ　田中　正
アンドレ・ジイド作『狭き門』について　田辺　俊徳
エクトル・マロ『家なき子』の主題について　丹　伊美子
フローベル研究　坪野　保
コンスタンの『アドルフ』について　鳥居　勤
バルザック作品研究ウージェニー・グランデについて　中山　蕃
Andre' Malraux "La Condition Humaine"　永田　富枝
アルベル・カミュの『ペスト』について　福元　克己
〃スタンダールとその作品〃　藤田　孝明
『狭き門』アンドレ・ジイド　松浦　忠夫
アルベール・カミュ『異邦人』について　三木　基成
ジャン・アヌイ　井上　武志
スタンダール『赤と黒』研究について　桝井　啓三
B・コンスタン論　山県　弘幸

独逸文学科

十七世紀以後の独逸思潮　鄭　観朗
Adalbert Stifter Der Waldfrunnen について　林崎　安仁
Schiller の Räuber における形容詞の機能の一考察　福岡　四郎
Heinrich von Kleist の "Prinz Friedrich von Homburg" の公子の人間的発展について〃　藤江　林
シラー　ドン・カルロスについて　三木　武治
独逸文学とゲーテについて　吉田　屯
トーマス・マンについて（「鷹の山」における主人公をとりまく諸観念を中心に）　吉延　猛
Hermann Hesse Schön ist die Jungend の作品について　清水　実
シラーの歓喜の歌について　永井　弘一
Arthur Schnitzler Über "Liebelei"　富山　定久
Hermann Hesse の "Über schön ist die Jungend"　森崎哲太郎
ケラーの『七つの伝説』より〃オイゲニア〃について　山崎達一郎

史学科

狩野派の絵画　青井　諄治
信長、秀吉のキリシタン宗門観　赤松　敏博
特殊部落について　浅井　康男
日本食物史から見た封建社会の食生活　池嶋　輝夫
大和川付替による産業の発達——河内木綿について——　磯山　雅司
商業広告史〃近世諸売招牌考〃　岩瀬　将彦
後南朝遺史　上中　皓資
我国に於ける貨幣経済の発達について　臼井　裕亮
郷土芸能について（九州地方を中心に）　内田　威
読売新聞史　悦過　晃
大化前代における地方社会の一姿相——特に讃岐国について——　遠藤　順昭
灘酒五郷の発生から今日まで　大江　勉
特殊部落民　岡井　勲
岸和田城を背影にした郷土史　岡部　俊一
中世末期の荘民の生活　岡本　英一
秀吉時代の大阪　小田、正昭
灘の酒造について　海藻　忠夫
「無声映画時代の活動写真について」　樫本　潔
わが国の城郭に関する史的考察　加藤　祝雄
かまぼこの歴史　加藤　義隆
映画史に於ける宣伝の分野　川嶋　啓介
築地小劇場時代の新劇　木下　正昭
戦後の映画輸出について　桜井　亨一
昭和における西園寺公の政治思想　大黒　幸夫
日本民族の起源　高井幸一朗
旧大和川による水害と河内国の農民生活　高木　康祐
十七、十八世紀における一廻船問屋について　高谷　雅三
琴平信仰について　高畑　武弘
歌舞伎劇場史　田口　英樹
日本服装史　武井　文典
日本プロ野球史の発展とその原因　多田　勝己

雅楽について（外来楽の渡来とその日本化）　田中　忠幸
明治時代の教育について　谷一　秋雄
日本の石鹸工業（第一工業製薬を中心として）　辻　治夫
明治時代の我国産業経済の変遷史について　中　勝弘
大津皇子の悲劇　西尾　武利
太閤検地について　仁科　勇雄
中世商業都市発達にみる荘園内の市場　松村　喜夫
明治時代の貨幣制度について　三木　敏与
正徳改貨について　水内　丈夫
阿国歌舞伎の歴史的前提　村上　律子
大本教と出口王仁三郎　安田　勝
〝大村純忠並にその藩内に於けるキリシタン〟について　山田　芳忠
日本体育発達史—武家体育時代を中心とする—　弓田　健一
摂津池田酒　吉尾　修
古刀期における日本刀歴史の考察　吉田　一郎
近世大和の繰綿問屋定法の研究　吉田太二郎
和泉一ツ橋領百姓一揆—古文書による一考察—　好本　義秋
町人勢力の発展と経済関係について（徳川時代後半期を中心として）　若林　法光
日本自動車史　和田幸一郎
江戸時代の農民社会　関口浩一路
江戸時代末期の開港による経済的影響　蛸谷　公平
古代伊予国大三島　大山祇神社について　松本　公人

西洋史専攻

南北戦争を契機としたアメリカの経済的発展に関する諸考察　高田　宏
パリュミューヌの意義　津嘉山智宏
ロベスピエールについて　福山　雅彦

東洋史専攻

陳独秀コースについて　中尾　達二
イスラーム奴隷について　中村　洋一

東洋文学科

支那の家族制度について　伊豆本敏朗
孔子と其の思想　内海　忠勝
陶淵明の思想　加藤　建治
論語とは、又我国との関係と影響について　下野　晃
孫子の兵法　堤野　吉堯
漢時代の中国文学　津留　耕造
陶淵明について　富築　忠
魯迅（生いたちから狂人日記発表にいたるまで）について　西川　彰一
魯迅の木刻運動について　橋本　仁
毛沢東と新民主主義論　橋本　秀雄
唐詩に於ける立役者　前川　敬治
唯物論における現代中国と毛沢東　松尾　武男
魯迅とその思想　松田　国光
三民主義と現在中国　山内　宏
支那風俗に於ける衣服及衣服と国民性について　山下　峯夫
我国に於ける陽明学の影響　吉田　寛員
白居易について（特に白楽天と日本文学の関係について）　和田　郁宏
中華民国と世界大戦についての政治思想　斉藤　繁

新聞学科

現代に於けるテレビの教育的利用価値と問題点　明渡　英男
戦後日本のマス・メディアについて—特に映画産業について—　飯田　正勝
マス・コミニュケーションの娯楽—特にテレビについて—　池谷　郁雄
世論と新聞　伊辻　昌彦
新聞論説の地位とその役割　伊藤啓之輔
放送報道の社説化について　稲本　英爾
新しい新聞企業の倫理　上野　幸利
広告効果の測定　上林　清
マス・コミの功罪　植村　俊之
広告効果の理論的考察　梅岡　晃
広告媒体としての新聞の地位　榎本　勝美
マス・コミに現われる犯罪性と、その青少年に及ぼす影響について　大北　敏夫
わが国の広告宣伝と国民生活について　大桑　甚加
〝マス・コミと経済〟の動きから見た今後の〝マーケッティングと広告〟のあり方に関しての一考察　大塚　敏勝
企業としての新聞の販売と広告　大山　良雄
広告宣伝の効果と分析　岡本　新樹
最近の広告の法令とそれに関する浄化運動　岡本　征夫
「近代広告代理業のあり方」　岡本　明
新聞の本質について　奥井　忠
マス・メディアに於ける表現の自由とプライヴァシーの権利　奥野　一弘
新聞広告の効果的傾向　折井大史郎
現代社会における広告の機能とその重要性　落合　英介
マス・コミュニケーションの影響　大西　虎二
戦後の新聞広告の変化　覚野　博夫
グラフィックデザインと現代絵画　陰山　寛治
広告とその種類、内容について　鍛治　邦昭
マス・コミの倫理と新聞の今日的課題　金森建次郎
調査方法—特殊地域におけるテレビの聴取率　狩野喜久治
「新聞製作上における誤報について」　川島　一恭
マス・コミと文化　菊井　義雄
現代広告に課せられた責務と今後の課題　北本　清之
日本新聞史の黎明期　久保川正明
世論の非存在説—世論は存在するか—　久保田道生
新聞広告の持性とその将来　児島　八郎
近代社会における、マス・コミュニケーションの機能　小西　皓
広告宣伝の本質について　小林　哲
一般新聞の指導性と悪影響　匂坂　安晴
新聞における選挙報道の実態　崎本　嘉秀
マス・メディアとしてのテレビジョンの社会的性格　佐藤　武史

広告のあゆみと現代社会に於けるその役割　更永　慶之
媒体としての新聞及雑誌広告の社会的ウエイトと問題点　沢村　成生
マス・メディアの中立性について　志賀　彦三
現代広告のデザインのあり方について　清水　汎
新聞に於ける広告の心要性と効果について　進藤　浩二
著作権をめぐる最近の諸問題
1. 新聞の著作権　1. 放送の著作権　杉原英二郎
広告、宣伝の媒体と技術　杉村　憲彦
広告心理学「広告と人間心理」　鈴木　弘
ラジオ、テレビによる学習指導法　鈴木　正光
電波とマス・コミ　瀬賀　安彦
広告代理業の組織と活動　滝川　俊輝
マス・コミュニケーションに於ける広告の立場と関連性　武田　義久
離島民の劣等感とマス・コミの関連性　竹本　靖秀
宣伝広告の歴史と今後の動行　田中昭二郎
広告現代宣伝論　谷口　正之
新聞における感覚性の問題点　田畑　正彦
テレビと新聞の広告の特質と将来性　高橋　正人
観光日本のホテル企業と其のPR　辻　進
マス・コミの社会的役割とその責任　土屋　昌弘
新聞と読者　利川　竜鍋
広告の本質と社会的使命　富岡　尚道
新聞広告の宣伝的価値　富永　昌義
新聞の大衆にあたえるもの新聞と機能と逆機能について　鳥原　大堇
業界新聞のマス・メディアとしての機能　中島　素士
広告媒体としての映画スターの地位　長瀬　正実
テレビ宣伝の媒体とその特殊性　中谷　通宏
新聞倫理の問題点—その自由と責任について—　西尾　淳
新聞広告の効果について　二宮　健
新聞写真の重要性　野口　志朗
〃新聞について〃　橋本　良孝
現代マーケティングと広告宣伝のあり方　長谷川謙蔵
現代に於ける新聞広告の文案　花岡　道雄
マス・メディアの発達とプライバシー権について　東山　徳雄
人気番組の諸相、その分析並びに大衆趣向についての研究　久本　捷
新聞色彩広告の効果について—白黒広告との対比—　福島　久雄
資本主義社会に於けるマスコミニケーションについて　藤本　重則
媒体調査と広告掲載及び撰択との考察　星川　義之
新聞における広告の必要性とその責任　増田　賢二
テレビ、ラジオ、新聞の共存性　松井　保
広告のもつ社会的利益と弊害について　松浦　延哉
広告とは何か　松本　隆志
現代における新聞広告と日常生活　松永　彰
マスメディアの新聞の地位〃なお続く新聞時代〃　丸山　通夫
広告手段としてのラジオ　三里　一弘
商業放送のコマーシャルメッセージ（CM）—その分析と作成方法—　南川　英雄
Mass Communication に於ける現代新聞広告について　都　弘
テレビの娯楽性と広告—その有り方と受け手の生活—　森近　泰夫
商業新聞としてのタブロイド版は成功するか　諸井　満
新聞の起源とその使命　安田　政勝
現代広告の社会性と道徳的倫理について　矢根　忠
放送の思案性について　山下　義夫
マスコミニュケーションと政治的無関心　山下　義夫
新聞及報導写真について　山下　怜三
マスコミュニケイション教育について　山本　明
放送と宣伝　山本　弘二
「マスメディアに向ける大衆の眼」　山本　善孝
広告の社会性とその影響について　吉村　孟夫
学校新聞について　芦田　三男
新聞の責任（主として人権に関する新聞倫理的あり方）　安西　寛晶
世論について　佐々木義寛
現代新聞批判論　田中　二郎
今日の新聞広告と雑誌広告　高田　由樹
広告とPR の似ている点と異なる点　露梨　弘人
犯罪記事とハイティーン犯罪者の心理　辻本徳太郎
マスコミ史上に於ける「見る」コミュニケーションの一考察　中道　昭員
新聞の色彩広告に於ける効果　西口　毅
大衆が受けるマスコミ時代の映画、テレビの影響　本郷　博一
ダイレクトメール　山上　高司

二部

英文学科

「マクベス」の悲劇性について　板谷　幸男
動く文章論　井之内康夫
悲劇マクベスにおける時代性と近代性　井手　政則
キャサリン・マンスフィールド作品研究—園遊会ほか代表作について—　上松　康哲
ブロンテ姉妹の作品に現れたる性格描写について　内本　陽子
シェークスピアの悲劇「マクベス」について　永川　政友
「老人と海」　岡田　光弘
「マクベス」研究について　表田　博
「老人と海」ハードボイルド・リアリズムについて　河南　政信
マクベスの人間性について
シェークスピアの〃マクベス〃に於ける人物の設定　喜多　卓三

校友

校友会の動き

二月

八　日　常議員会
十五日　総務部会
十六日　広報部会
十七日　組織部会
十八日　事業部会
十九日　財務部会
二十七日　組織部―学友会懇談会
二十九日　新旧学友会代表との懇談会

常議員会

役員改選後、初の常議員会が二月八日午後五時半から清交社で開かれた。当日は大月会長はじめ四十四名が出席した。

まずはじめに常議員選委員長・樫本信雄氏から選考経過がおよそ次のように発表された。「選考にあたつては各方面から公正に選びだした。重点は比較的若くて仕事をやつていただける人にお願いした。」

つぎに大月会長があいさつの後、議事にはいつた。副会長推せんの件は「校友会活動も緒についたところだからこのペースをくずさずやつていくことが大切だ。したがつてご面倒だが三副会長ともご留任願つたら」との矢野常議員の意見に全員が拍手で賛意を表明して、岡野衛士、樫本信雄、長柄金吾三氏の副会長重任が決つた。

また五部制を続けてゆくかどうかについては、協議した結果、従来通り五部構成で進めていくことに決定した。

新常議員の部属決定の件は大月会長が示した案が承認された。

なお、常議員中から副会長が選ばれたため新たに三名の常議員が補充された。新常議員の各部分掌は次の通り

【総務部】
大島武夫、寒川喜一、北原元茂、坂本竜夫、鮫江城夫、久井忠雄、前川太良右門水本信夫、安富敬作

【事業部】
阿部甚吉、河内兼三、木村吾郎、後藤正身　佐伯崇邦、塚田正則、西川省一、畑下辰典、村上精三、望月桂、山田松太郎

【広報部】
岩城富子、越智比古市、佐伯五郎、坂本幸夫、篠原昭三、林信夫、東浦栄一、藤田令允、三島律夫、吉田三七雄

【組織部】
上野俊彦、奥村孝、門上敏夫、金本朝一千巌克郎、寺西武、永井安一、丸岡武、宮崎平、矢野文雄、養父一郎

【財務部】
石丸豊、逢阪勝見、中谷政男、長沢健一西村治三郎、浜本正吉、平沢農一、前田軍治、向井裕亮

総務部会

新総務部員による第一回の総務部会が二月十五日天六学舎で開かれた。席上、部長、副部長の互選を行なつた結果、寒川喜一氏を部長に坂本竜夫、安富敬作両氏を副部長に選出、重任が決定。また総務部の今後の運営方針については各部の活動がより円滑に進むようにするため、各部連絡協議会なども多く開くことなどをきめた。

広報部会

第一回目の広報部会が二月十六日午後六時から天六学舎で開かれた。

部長は林信夫氏、副部長には佐伯五郎坂本幸夫両氏の重任が決定。

今後の運営については、新聞「関大」の発行のみでなく、もつとはばの広い広報活動を続けてゆくための具体的な方策を検討した。

組織部会

第一回組織部会は二月十七日開かれ、部長、副部長の互選をはじめに行い、その結果門上部長、金本、寺西両副部長の重任が決つた。

また、新年度の事業計画についても検討したが、昨年度数回開催して大好評であつた講演会を、さらに四国・九州方面でも開催する予定をたてた。この講演会は大学のPRをかねるため大学とも連絡をたもち、協力して開かれるもので、主として七、八月の夏季休暇中の計画である。

事業部会

新事業部会は二月十八日開かれ、最初の議題である部長・副部長の互選については全員で協議のすえ村上部長、河内、畑下両副部長の重任に決定した。

また、事業部として新年度の事業方針を検討したが、山田就職部長が事業部にはいつたので、従来からも対策を講じていた学生の就職あつ旋問題については大学と密接な連絡がもてるためその成果が期待されるが、その対策についても討議された。また事業部の事業として大学のPRをもかねる「学歌レコード」の製作等も協議したが今後ひきつづいて具体的な検討を進めることになつた。

財務部会

新しい財務部の第一回部会は各部部会につづき、二月十九日午後六時から天六学舎で開催。

部長、副部長の互選を最初に行ない、西村部長、逢阪、平沢両副部長の重任をきめた。これで新執行部各部の部長と副部長はいずれも重任に決定した。

部会はつづいて昭和三十五年度予算案作成についての意見を交換、当年度会計の中間報告について検討した。

組織部―学友会懇談会

組織部では二月二十七日午後二時から千里山学舎で、学友会代表と懇談会を開催。

これは学生に校友会活動の認識を深めさせ、お互の連絡を密接にするために開かれたもので、校友会側は樫本副会長、金本組織副部長らが出席し種々懇談した。また今春卒業する人々ができるだけ多く校友会に入会するよう奨励することについても意見を交換した。

關西大学法制史学会
關西大學經濟學會經濟史研究室　共編

大阪周辺の村落史料

第四輯　五人組帳　フランス綴函入　一八三頁　四〇〇円

五人組帳の研究は既に多く試みられているが、同じ地方のものをまとめ、同じ地方にあつても年代によつて異ることの研究にまで及んでいない。収録のものは大阪周辺の五人組帳のみをまとめた特色あるものとした。

第一輯　庄屋留書　既刊
第二輯　耕肥、拝借銀、頼母子　既刊
第三輯　證文集、村役人　既刊

刊行　關西大學
刊行取扱　關西大學出版部

なお、既刊各輯は貴重稀覯文献の活字版として各方面の注目を受け、古書市販価格が頒布価格の約二倍となつている現状です。在庫数も残り少くなつていますから御入用の方は直接当部へ御注文下さい。

關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十五年三月三十日発行（毎月一回三十日発行）
關西大學學報　第三三七号　三月号
編集兼発行人　久井忠雄
発行所　大阪市大淀区長柄中通二丁目　關西大學出版部　Tel.(5)1111
印刷所　株式会社ナニワ印刷所

關西大學商学会編
關西大學　商學論集　第四巻第五号
昭和三十四年十二月　A5判　八九頁

内容
水産商品の流通に関する若干の問題……柏尾昌哉
産業循環の実証的計測方法について（一）……瀬尾芙巳子
―ミッチェル＝バーンズ方式批判―
ディートリッヒ労仂共同体論に関する一考察（一）……大橋昭一
レーマン「原価理論」についての一考察（一）……山上達人
資料紹介
モザック「国際貿易における一般均衡理論」（一）……木村滋

關西大學法学会編
關西大學　法學論集　第九巻第二号
昭和三十五年一月　A5判　一〇一頁

内容
論説
争訟手続の委任代理について……内田修
公共の福祉と公共の秩序（その二）
―福祉国家と警察国家―……堀堅士
身分法学者ルイ・ブリデルのフェミニスム
―「女性と権利」を中心として―……松本暉男
判例研究
特許の権利範囲の解釈と外国特許明細書の記載……内田修
就労拒否の不当労仂行為とロックアウトの交錯
―布施交通争議事件（大阪地裁33・7・17判）…岸井貞男